## 班別予約共同購入

生協設立当初、共同購入のシステムは月1回の「班別予約共同購入」であった。

このしくみのメリットは、出資・利用・運営という協同組合の基本をなすものであった。

**①大量発注で仕入れを安くできる**
**②予約なので不要な在庫や倉庫が不要**
**③班単位なので配達効率が高い**
**④班が情報共有、議決の単位として機能**
**⑤生産者にとっては、生産管理がしやすい**

地域の中でおおぜいの主体をつくり、具体的な社会改革をめざすにあたっては非常に機能的な制度で「計画購入」とも言われていたが、予約なのですぐに品物が手に入らない、班会議がめんどうなどのデメリットを感じる組合員もいた。

## 班から個への転換

個人が集まって「おおぜいの私」として連帯し、事業をすすめていたが、その活動の中心は在宅の「主婦」であった。社会のあり方やライフスタイルの変化とともに、共同購入の単位としても意思決定の単位としても難しくなってきた。そのような状況にともない、注文のサイクルは月1回から2回、毎週注文へ。共同購入の業態も班から戸（個）別配送の導入、デポー（店舗）の建設へと推移していった。このことは組合員の情報共有や活動への参加のあり方、意思表示のあり方の変化へもつながっていった。

## 持続可能な予約共同購入の模索

社会の変化の中で、生産者とともにサステイナブル（持続可能）な共同購入のあり方を模索したものの一つが「よやくらぶ」。便利な予約システムというだけではなく、予約によって「食べる約束」を実現し、利用をまとめ（利用結集）、計画的な生産につなげるもの。予約はデポーでも、お米やクリスマス正月用品をはじめとして実施されている。

利潤効率中心の経済は排他的格差社会を生み出してしまった。長期的な観点から持続可能な社会をめざしFEC（食・エネルギー・福祉）自給圏*を広げること。それが生活クラブ40周年の「奪わない食、ともに生きる地域」スローガンとなった。

*「FEC自給圏」とは、経済評論家の内橋克人さんが提唱されている概念です。